会　　　議　　　録

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 会議名 | 令和３年度文化によるまちづくり推進委員会（第３回：第３部会） | |
| 開催日時 | 令和３年１１月２５日（木）　１８時～２０時 | |
| 開催場所 | 市役所２階　庁議室 | |
| 出席者 | 湯城　明彦（部会長）、岩本　信子、坂井　久美子、松永　進、縄手　秀樹、齊藤　大二郎 | 委 員 数　６人  出席者数　６人  欠席者数　０人 |
| 欠席者 | なし |
| 事務担当課  及び職員 | 市民部文化スポーツ推進課  市民部：芳司参与  文化スポーツ推進課：石田課長、奥 | |
| 会議次第 | １　開会  ２　（次第１）まちづくりへの活用  ３　（次第２）文化芸術振興の評価  ４　閉会 | |
| 事務局  委員  （松永）  委員  （齋藤）  委員  （岩本）  事務局  委員  （齋藤）  部会長  （湯城）  委員  （坂井）  委員  （齋藤）  （岩本）  部会長  （湯城）  委員  （松永）  部会長  （湯城）  委員  （縄手）  事務局  委員  （縄手）  事務局  委員  （縄手）  委員  （齋藤）  事務局  委員  （松永）  事務局  部会長  （湯城）  委員  （齋藤）  委員  （縄手）  委員  （委員）  部会長  （湯城）  委員  （縄手）  委員  （岩本）  委員  （齋藤）  部会長  （湯城）  事務局  委員  （岩本）  事務局  委員  （縄手）  部会長  （湯城）  委員  （縄手）  委員  （岩本）  部会長  （湯城）  事務局  部会長  （湯城）  事務局  委員  （縄手）  委員  （岩本）  部会長  （湯城）  委員  （岩本）  委員  （齋藤）  部会長  （湯城）  委員  （縄手）  部会長  （湯城）  部会長  （湯城）  委員  （岩本）  事務局  部会長  （湯城） | **次第１　まちづくりへの活用**  現在の「かるた」の取組みについて、御紹介いただきたい。  市内小中学生を対象とした学校かるた出前授業を通じた取り組みや市広報「さんようおのだ」でのかるたコラム等で、かるたが盛んなまちとしてアピールはできていると思う。今後は、高齢者や障がい者など含め、誰でもできる「お坊さんめくり」などもＰＲすると多くの老若男女が市内のさまざまな場所で楽しむことで、よりかるた文化が盛んになるのではないか。また、かるたクイーンが２人いることから、例えばレノファ山口とのタイアップイベントなど、文化とスポーツのコラボも実現できると良い。  山形県天童市で開催されている天童まつりで、子どもたち自身が将棋の駒に扮する「人間将棋」がある。例年見学者が多く、テレビ放送などでマスコミでも注目される。かるたでもこのような大勢の目に触れ、人が来てくれるようなアピールができないだろうか。  １１月１８日（木）に高泊公民館で開催された「第５回　高泊あいあい講座　小倉百人一首かるた講座」に参加したが、とても面白かった。  小倉百人一首かるたは高校の冬休みの宿題で覚えて以来、遠ざかっていたが、久しぶりでも久保クイーンの説明が上手く、改めて興味をもった。今後も高齢者へ向けた公民館活動として続けてほしいが、市民への情報発信が不十分だったと思う。実際、公民館長に直接話を聞くまでは講座の存在を知らなかった。  子どものときに様々な文化に触れておくと、大人になったときに思い出すことがある。こうした公民館での文化の取組みは継続していくことが大切であると思う。  文化を継承していく担い手は、単なるボランティア活動ではなく、ある程度の対価を支払わなければ継続しない。市として予算化し、文化団体に支援していくなどの仕組みづくりが、文化活動を継続して行い後継者を育てるためにも必要である。  同じくボランティア活動に頼ってはいけないと思う。また、イベントの参加費においても無料にするのではなく、いただいた参加費の中から講師に対価を支払うなどしないとイベントが続いていかないと思う。かるたにおいてもガラスにおいても、まずは継続していくことが大事であると思う。  山口東京理科大学にかるた部があるが、実際に活動している部員は少ない。山口東京理科大学は、理系なので学年が上がっていくにつれて、授業や卒業研究等が多くなりカリキュラムがかなりタイトになる。そのためサークル活動などに時間を取れないのが実情。現在１年生にかるた経験者がいて、引っ張ってくれている。  今時の中高生は、いつもどこでもスマートフォンでゲームなどをしている。また、本を読んだりテレビを見たりしないとも聞く。そんな若者向けに、例えば「小倉百人一首かるた」のゲームアプリなどがあるといいのではないか。  ここまで、関心を拡げるために、お坊さんめくりも含めてＰＲしていくこと、公民館での活動を増やし、継続して行っていくこと、などの意見があったが、その他かるたやガラスの新しい取組みについての意見があれば、お伺いしたい。例えば、かるたについては「お坊さんめくり」を自治会単位でチーム分けをし、市長杯を争奪し合うような、市内での大きな大会が年１回のペースであると注目されていいと思う。  市内の小学生を集めて、小学校対抗かるた大会を開催してはどうか。  教育委員会と連携して実際に小学校にかるたを取り入れることは可能なのか。  クラブ活動という形でなら可能であるが、現在は多くのクラブ活動がコロナ禍の影響によりほとんど活動ができていない。今後感染状況が落ち着きクラブ活動が盛んに行われるようになったときのため、校長会でかるたクラブの設立を市として提言してはどうだろうか。  今年度、高千帆小学校で授業の中に組み込まれている「正課クラブ」で新たにかるたクラブが出来た。現在も久保クイーンの指導によって活動している。また、市の総合計画中期基本計画における目標の１つとしてこれまでは「競技かるた人口を増やす」としていたが、「かるたの団体を増やす（学校の部活動も含む）」に変更している。そうすることで、かるたに興味を持った方が、かるたを始めようとしたとき、団体に所属し継続的に活動することができる。また、中学校においてはクラブ活動を減らし教員の負担を減らす方針になっているため、総合文化部のような様々な文化活動を行っている中にかるたを取り入れてもらうなどで、生徒たちの興味を増やしていくことも考えていきたい。  競技かるたの試合を実際に見たことがない人向けに、おのだサンパークでかるたのデモンストレーションを行ってはどうだろうか。多くの人の目に触れるという点では最適な会場であると思う。開催時期は正月で、習字とかるたのコラボなどをするとよいと思う。  現在かるたについては、２名のかるたクイーンと山陽小野田かるた協会に指導者を担ってもらっているが、今後の指導者の育成についてはどうするのか。かるたのイベントや事業が同時に多くの場所で開催する場面ができたときに指導者が不足することが懸念される。  学校にもよるが、「きまり字五色二十人一首」をモジュール学習の時間に活用しているところもあるので、ここを切り口に教員にかるた指導にあたってもらうことができるのではないか。  「きまり字五色二十人一首」は全学校に配付しているのか。  市で読み札と取り札のセットを全小中学校に配付済みである。  普段から教員が子どもたちにかるたの魅力を伝えられるような仕組みができるとすごく良いと思う。この度、竜王中学校の教員向けに学校かるた出前授業を行ったが、指導者育成のためにも今後もこのような取組みは大事であると思う。  以前、この度の新しい文化振興ビジョンのメインターゲットを子どもに絞り、２０歳までに様々な文化に触れる機会を作ることが大事であるという話をさせていただいたが、市が本気で取り組んでいかなければ実現しないということを痛感している。  各小学校の児童にきららガラス未来館でガラス制作体験をしていただいている。体験した子どもの反応も良く、子どもは親や祖父母といった大人にも話をするので、そこから広がっていくとよい。  コロナ禍の影響で学校は休校や授業数の減少などで教員への負担は増大していると思う。そのような中で、現場にいる教員はかるたの指導等ができるのだろうか。  実際の現場の教員は、新たに英語などの外国語やプログラミング、タブレット端末の使用などカリキュラムが増えているため、かなりハードである。その一方で、子どもたちは普段からタブレット端末を使いこなしているため、子ども向け小倉百人一首のネット配信や学校別オンライン大会など、タブレット端末を用いた新しい取組みができるのではないかと思う。また、図工の「鑑賞」という授業で現代ガラス作品の写真をタブレット端末に配信し、市のガラス文化に触れてもらうことができる。また、市内の各公共施設に設置している現代ガラス作品を用いたオンラインスタンプラリーを行えばメディアにも注目され、市内外からの参加も見込めるため、ガラス文化の発信につながると思う。今後のタブレット端末の文化における活用は、子どもたちが興味を持つきっかけづくりになり、文化への入口になると思う。  ガラス作品は、新山口駅や新下関駅、山口宇部空港など多くの人が行き交う場所に設置することはできないのか。  現在、きららガラス未来館はガラス作家が５名所属しており、作り手はいるが、展示までは手がまわっていないのが現状である。これは市も同じで、人事異動等により短期間で担当者が変わってしまうと思うように事が進まないのが現状である。計画的に展示替えをしようと思えば、やはり専門の知識を持った人材を配置した部署を市で立ち上げ、長期的にガラスに特化した取組みを行っていく必要があるのではないかと思う。  学校の入口に４０型のテレビが設置してあり、学校行事しか放映されていない。ここに市の文化をＰＲする動画を流してはどうか。  市民病院にも同じものがあるといい。  先日、不二輸送機ホールで開催中の日本のガラス展に行ったが、作品のキャプションの多くは、タイトルと作者名しかなく、なぜこのタイトルなのか？など、もっと詳しい情報があればいいと思った。これらを子どもたちが見たときに、よりわかりやすい形になれば興味や関心を惹きやすいのではないか。  説明についてはいろいろな意見があって、ガラス作家とも話をすると、「作品を見たとき、理屈ではなく、好きか嫌いかを感じることが重要だと思う」との意見もあった。ガラス体験をした小学生の子どもたちから感想文をいただくことがあるが、１度の体験にも関わらず、特に心に残った子からは詳細な感想が書かれていて驚くことがある。人によって感じ方が違うのは当然なので、特に子どもたちには「感性を養う」という意味でそれぞれの鑑賞の仕方があっていいと思っている。  美しいものを見た時、素直に「美しい」と思える感性。  自分がきららガラス未来館で作った作品が市民病院に飾ってあるが、市民病院に行ったときに見かけると嬉しい気持ちになる。今度、厚狭に保育園が新築され、そこの園児と先生がガラス作品を制作したと聞いた。そのように、子どもたちが作ったガラス作品が市のいろいろな施設に残るのはすごく良いと思う。  隣の宇部市は彫刻に力を入れており、同じ造形という部分で山陽小野田市のガラスとコラボできないだろうか。  ガラス作品を常設で展示している美術館が山口県近辺にあるのだろうか。  岡山県鏡野町にある「妖精の森ガラス美術館」に常設のガラス展示がある。広島県にもあったが、閉館した。  今後の市の現代ガラス展などでイベント名に、「西日本唯一の」といった枕詞があると、ここにしかないという特別感が出て、行ってみたい！と思わせることができて、良いと思う。  歴史民俗資料館のような、常設のガラス展示は市内でできないのだろうか。  現在の文化振興ビジョンの策定会議の際にも、常設のガラス展示の話が  出たことがあった。今回新たに策定する文化振興ビジョンの中にも取り入れてはどうだろうか。  今後、人口減少に伴う税収の減少によりますます市の予算は厳しくなるため新しく建物を建てることは難しい。しかし、現存の建物で空き家や公共施設などで使わなくなった場所をリノベーションするなどして活用するといいかと思う。また、小野田地区と山陽地区とで、どこでも展示作品を見ることができるように複数設置することも必要と考えている。  常設の展示となると、専任の管理体制が必須であり、展示替えを定期的に行わなければならない。  多くのガラス作品が文化会館で保管されている状態なので、今後それらを活用した企業向けの取組みも考えている。  ガラス展などでガラス作品をみたとき、作品を購入してどこに飾るかを考える人もいる。実際に購入した方が写真を撮ってＳＮＳ等でアピールすると効果的なのではないか。  人が多く来る江汐公園にもガラス作品が展示されているとよい。管理をしっかりとして、地域で守っていくことが大事。  地域伝統文化の継承についての意見を伺いたい。  小野田はかつて窯業が盛んだった歴史があり、硫酸瓶など今もその足跡が残っていることが多い。こうした地域文化を文化財でなくても、有形無形に関わらず保存、伝承していくことが大事である。  戦後、人口減少に伴い多くの文化が廃れていった。刈屋盆踊りも一時期はあらゆる場所で盛んに行われていたのに、ついに絶えてしまった。こうしたことは、知らないだけでかなり存在しているはず。  きちんと記録に残しておけば、いつか誰かがその文化に触れる機会が出来るはず。  合併前の旧小野田市と旧山陽町では、歴史も文化も違うため、それぞれの地域性を掘り起こして整理しておく必要がある。  地域の伝承文化を今のうちに整理しておけば、後世に伝えていきたいものとして新しい文化振興ビジョンに盛り込んでいけると考える。  **次第２　文化芸術振興の評価**  長期ビジョンの必要性について意見を伺いたい。  まず、様々な取組みを継続していくことが大切だろう。そのためには市に専門の人材を配置した部署をつくり、長期的な取組みを行うことが、長期ビジョンの必要性なのではないか。  この度の新しい文化振興ビジョンに盛り込みたいと考えているのが、文化について全体的に、また専門的にコーディネートできる人材の確保である。行政職員では限界があるため、それを補うコーディネートができる人材が長期的に取組みを行うことで、継続した取組みとなる。また、教育や文化は即時に効果が発揮されるものではなく、評価も難しいが、５年１０年といった長期的なビジョンで取組みを進めていくことが必要である。独自の評価基準についても、すぐに形にしていくことは難しい。新しいビジョンにおいてもこのようにしていきたい、というような記述になると思う。  きららガラス未来館においても、数字による年単位の評価はあるが、長期的な目でみたときの評価基準はなく、担当の市の職員が異動等で短い期間で変わるため、長期的に同じ人に客観的に数字以外の部分で評価いただいたくことが必要であると思う。また、独自の評価基準をつくることはかなり難しいと思う。他市の事例をみても、民間業者に委託したり、アンケート調査を行っているところもある。先ほども話が出たが、専門的な人材を登用する、財団を立ち上げて管理運営していくなどあらゆる選択肢があると思うので、どのように進めていくかを考え、新しい文化振興ビジョンに盛り込んでいかなければならないと思う。 | |